

〈研究ノート〉

# 露の新治：「ハイブリッド落語家」への道

Tsuyuno Shinji : The Load to flower as a Hybrid Rakugoka

寺口 瑞生<sup>1</sup>

## 要旨

落語家・露の新治は、「お笑い人権高座」を本芸として確立した希有の存在である。さらに、本来の落語についても複数の要素を持った「ハイブリッド落語家」としてその存在感を増している。人権と落語の持つ親和性を体現する新治の取組は、「多文化共生社会」の実現に大きな役割を果たす可能性を秘めている。

キーワード：露の新治, 落語, 人権, ハイブリッド

Tsuyuno Shinji, rakugo, human rights, hybrid

## はじめに

落語家・露の新治（つゆのしんじ、1951年1月8日－）は、人権問題をわかりやすく解説し差別をなくすための力とする「お笑い人権高座」を、落語家の余芸としての人権講話ではなく本芸として確立した希有の存在である。その本芸の確立過程については、前稿「露の新治：お笑い人権高座への軌跡」としてまとめた<sup>1</sup>。

本稿はその続編として、「お笑い人権高座」の活動に加えて、本来の落語の高座においても全国で幅広く活躍する現在の姿を、「ハイブリッド落語家」という概念を用いて記述する。それを通して、落語そのものが持つ笑いの力こそが、すべての人に人権が保障される「多文化共生社会」の実現に向けて大きな役割を果たす可能性のあることを検証することが本稿の課題である。

今回の課題に取り組むにあたって、新治がオフィシャルサイト「まいどおおきに露の新治です」<sup>2</sup>に連載する「へらへら日記（2009年4月1日～2023年8月31日）」を主な資料として使用する（以下、「日記」と略記する）。研究期間中の新治が多忙であったことと、コロナの収束が見込めない間、対面インタビューを極力避けるためである。

なお、本研究については、「人を対象とする研究倫理審査」により「承認番号：K22-015」を受けている。

## 1 ハイブリッド落語家とは

ハイブリッドとは、一般的には「雑種／異なった要素が混ざり合っていること」と理解される<sup>3</sup>。本稿において「ハイブリッド落語家」という場合、次の二つの意味を込めている。

一つには、新治は上方林家一門と桂春団治一門という異なる2系統の芸風を受け継いでいること、もう一つには、上方落語家でありながら東京の定席に定期的に顔付けがなされ、東京で活躍する上方落語家として認知されていること、この2点を根拠として本稿では新治を「ハイブリッド落語家」として位置づける。

なお、「林家」という亭号は江戸・東京でも使用されるが、上方との系譜関係は明確でないため、ここでは「上方林家」という表現を用いている。

### 2-1 上方林家一門

一般的に、プロの落語家になるためには師匠のもとに弟子入りして修行を経ることが不可欠である。新治が師匠として選んだ人物は、林家染三（はやしやそめぞう、1926年10月8日－2012年6月12日）であった。染三は、1958年に三代目林家染丸（はやしやそめまる、1906年3月25日－1968年6月15日）に入門して染蔵と名乗るが、後に染三と表記するようになる。

新治は、1975年12月に染三に弟子入りして「林

家しん三」という芸名をもらい、落語家としての歩みをスタートさせた。ところが、当時染三は上方落語協会から除名処分を受け、落語界に居場所を失っていた。いわば新治は、落語界に属せない落語家として歩み出したのであった。

はたして、染三とは落語家としてどのような存在であったのか。弟子の1人である林家三喜（後の漫才師・オール巨人）は、染三の訃報に接してブログに以下のように綴る<sup>4</sup>。

関西の落語家の重鎮でありながら協会には入らずに少しユニークで異端児的存在で、ネタの宝庫の咄家さんでした…

同様に、新治自身も「日記」2012年6月15日付けの記事で

染三師匠はネタをたくさんお持ちで「景清、煙草の火、鹿政談、禁酒関所、相撲場、いらち傳、猫の災難、猿後家、腕喰い」など全て染丸譲りの名人芸でした。特に、煙草の火と景清は染三師匠が一番だと思います。残念ながら、私が入った頃には、高座に上がられる機会はありませんでした。「五光、片袖」などは話には出ましたが、実際聞いたことがありません。

このように、染三という落語家は三代目染丸譲りのネタを沢山持ち、噺の上手さには定評があったのである。

染三が師事した三代目染丸には、最初の弟子の染三に続いて、染奴、小染、染二、染和といった弟子がいた。染奴は後に桂米朝一門に移り、タレント落語家・月亭可朝（つきていかちょう、1938年3月10日-2018年3月28日）としてマスコミを賑やかす存在となった。新治は、可朝とも少なからぬ因縁がある。その訃報に接した新治は、「日記」2018年4月22日に次のように記述する。

月亭可朝師匠は、前々名、林家染奴。私の前名は、林家さん二、当時の師匠は林家染三師匠。可朝師匠とは兄弟弟子。その縁で、直弟子の、月亭ハッピー、月亭ハッチとは、ズット一緒にやってきました。落語協会に入っていない染三一門は、咄家から相手にされませんでした。それで、新たに他の一門に入り直した者もおりますし、漫才、漫談、MCに転向した者もおります。

売れたのは、オール阪神・巨人のお二人です。私は染三一門の最長記録と自負しています。そんな私を咄家として分け隔てなく扱ってくださったのが、可朝師匠とその一門、そして、当時、地域寄席を作っていた「旭堂小南陵（現南陵）、南光（現南鱗）、南学（現南左衛門）、桂文福、笑福亭仁福、など、グループ寄席集め」の方々です。

そんなご縁で、可朝師匠についていたことがあります。玄関脇にジャガーがデンと止まっている西宮の豪邸で「野ざらし」のお稽古もして戴きました。「野ざらし」は、可朝師匠が談志師匠から戴き上方に移されました。今は皆、当たり前になってますが、野ざらしが上方でやれるのは可朝師匠のおかげです。

染三のもとで林家しん三からさん二へと改名し、デラシネ状態でもがく新治を扶けたのは同じ一門という意識で手を差し伸べた可朝であったのだ。可朝は東京の立川談志（たてかわだんし、1936年1月2日-2011年11月21日）に可愛がられ、関西での活動の場を失った時期には東京で談志の引き立てに預かっていた。その談志のネタを可朝経由で受け継いだことは、新治のハイブリッド性的一面を示すものであろう。

同じく三代目染丸の弟子の染二は、後に四代目林家染丸（1949年10月10日-）となる。新治は当代染丸から「稽古屋」をつけてもらう（落語のネタを教わること）が、その時のことを2020年2月15日の「日記」に記している。

「稽古屋」は、ずいぶん昔に染丸師匠にお稽古をして戴きました。師匠自ら三味線を弾きながら、丁寧に教えて戴いたことは、私の宝物です。

また、新治の十八番のひとつ「中村仲蔵」についても、染丸とのエピソードが語られる。当代染丸の弟子・三代目林家染二（はやしやそめじ、1961年9月17日-）が新治から「中村仲蔵」の稽古をつけてもらい、文化庁芸術祭大賞を受賞する。2020年12月26日の「日記」には、

文化庁芸術祭で、林家染二さんが「中村仲蔵」で見事、大賞に輝きました。早速、染二さんから丁寧なお礼の電話を戴き、嬉しかったです。

以前私が、NHKで「中村仲蔵」をさせて戴

いたのを染丸師匠が見てくださり、わざわざハガキでお褒めの言葉を戴きました。私にとって、誠に嬉しく、ありがたいことでした。後にも先にも、こんなことは初めてのことで感激しました。ハガキをスケジュール帳に挟み、持ち歩き、折々に眺め励みにさせて戴いていました。今回、染二さんの受賞にお手伝いをさせて戴き、染丸師匠に少しは恩返しができたかなと思います。「中村仲蔵」は、他にも何人かの方にお稽古をさせて戴きました。その一人、露の瑞さんが、自身の会でネタおろしをした時のゲストが染二さん。その時、瑞さんの熱演を見て「自分もやりたくなりました」と言われました。彼女も貢献したわけです。

このように、新治は入門から現在に至るまで、上方林家の一門意識と芸風の中で育てられてきたのである。

染三は2012年6月12日に亡くなるが、その第一報は上述のオール阪神のブログにご子息から連絡が入ったのであった。そして新治のもとに届いたのが6月14日朝のこと、ちょうど鈴木演芸場中席に出演中であったことから、その日の演目を「ちりとてちん」に決める。このいきさつについては当日の「日記」に次のように記している。

それで今日は「ちりとてちん」に決めました。染三師匠から戴いた最初のネタで先代染丸の型です。現在林家でちりとてちんを演る方は知りません。お供養と思ってやらせて戴きました。そのためには、前の人に「ちりとてちんを演らないで」と頼まねばなりません。後に出る者としては、してはいけないことですが、事情を話して三三、喬太郎、たい平、琴調の皆さんにお願いしました。琴調先生は豆腐ネタさえ避けて戴きました。皆さん快諾戴きおかげで、ちりとてちんを演ることができました。私が高座を勤めたのは、染三師匠が茶毘にふされているちょうどその時。お客様の笑い声で送って戴こうと思いきりやりました。

染三の元に入門してから37年、新治は最初の師匠の死を、上方林家の芸で送ることができたのだ。

## 2-2 桂春団治一門

林家さん二から「露の新次」となったのは、1982年8月のこと、染三のもとを離れて二代目露の五郎兵衛（つゆのごろべえ、1932年3月5日－2009年3月30日）の弟子となったのだ。落語家の香盤（協会内の序列）では、染三の弟子であった時代はカウントされず、五郎兵衛の弟子になった日から、新治の上方落語家としての歴史が始まることになる。

五郎兵衛とはどのような人物か、『落語家事典』<sup>5</sup>によれば、「昭和22年11月二代目春団治に入門し春坊。35年10月二代目小春団治、43年4月二代目露乃五郎を襲名。その後、62年に表記を露のと改めた」とある。つまり、新治の2人目の師匠である五郎兵衛は、本来二代目桂春団治の弟子であった。その後、戦後の上方落語界の紆余曲折を経て、三代目桂春団治の門下として上方落語協会入りを果たし、1994年から2003年まで上方落語協会の会長を務めた。

いわば、露の一門というのは春団治一門の分家という位置づけになるのである。それ故、露の新次から「露の新治」と改名し（1991年9月）、五郎兵衛の弟子として研鑽を続ける新治は、春団治一門（正確には二代目春団治）の芸風の中で落語家としてのキャリアを積み重ねていく。

さて、五郎兵衛とはどのような落語家であったのか、新治自身の五郎兵衛評を「日記」2010年2月1日の記述で見てみよう。

繁昌亭、露の五郎兵衛一周忌追善興業。私は、師匠の十八番の一つ「蛸坊主」で臨みます。師匠、五郎兵衛は、家の芸である、先代春団治師匠ゆずりの滑稽咄（阿弥陀、二番煎じなど）、先代小春団治師（後の、花柳芳兵衛師）の「正本芝居咄」（本能寺、鏡山、瓢箪場など）、先代林家正蔵師匠（稲荷町の師匠）ゆずりの芝居咄や怪談咄（雪の戸田川、真景累が淵など）、さらには艶笑（艶咄）に至るまでまことに幅の広いネタを持ち、全てが一流でした。弟子は及ばずながら、その一部、一部を少しづつ受け継いでいます。私も、私だけが稽古をしてもらったネタが若干あります。その一つが蛸坊主です。願生ります！

つまり、自分の最初の師匠である二代目桂春団治（1894年8月5日－1953年2月25日）、初代春団治の弟子の桂小春団治（1904年10月20日－1974年

8月15日)、師亡き後私淑した東京の八代目林家正蔵(はやしやしょうぞう、後に林家彦六、1895年5月16日-1982年1月29日)、東西の個性ある師匠方の多彩な芸を吸収する珍しい存在であり、五郎兵衛自身もいわばハイブリッド落語家のはしりであるとも言えよう。

五郎兵衛と正蔵との関係は、その後新治自身にも色濃く投影される。「日記」2013年7月19日には、次のような記述が見られる。

10月12日(土)の第4回新露の治寄席「新治ひとり会～彦六・五郎兵衛・新治の噺～」先代林家正蔵(彦六)から、師匠五郎兵衛が受け継いだネタのうち、新治が戴いたのは「中村仲蔵」、「蛸坊主」、「雪の戸田川」の3席。その中から、「中村仲蔵」と「蛸坊主」、他1席の、3席申し上げます。

つまり、現在の新治の代名詞ともなっている「中村仲蔵」「雪の戸田川」「大丸屋騒動」といったネタは、二代目春團治の芸風を受け継ぐ五郎兵衛と、江戸前の芝居噺・怪談噺の名手である正蔵との東西交流の成果を受け継いでいるのである。ハイブリッド落語家と称する所以である。

### 3 東京の定席への出演

「定席(じょうせき)」とは、種々の演芸を一年中通して楽しませる寄席である。関西では落語を楽しむ定席が長らく不在であったが、2006年9月15日に「天満天神繁昌亭」が、そして2017年7月11日は「神戸新開地・喜楽館」が誕生した。

他方、東京には戦前から経営を継続する定席が今日でも健在である。「鈴本演芸場」は安政4年(1857年)の創業、「新宿末廣亭」は1897年(明治30年)、「池袋演芸場」は1951年、そして「浅草演芸ホール」は1964年(昭和39年)のスタートと、いずれも(原則)年中無休で演芸を楽しませてくれる。

定席の中でも最も歴史の古い東京上野・鈴本演芸場には、新治の師匠・五郎兵衛が定期的に出演していた。それは、八代目正蔵との縁がもととなり、正蔵没後は師に変わって怪談噺でトリ(主任、寄席興行の責任者として一番最後に出演する)をとるほどの存在であった。怪談噺というのは高座の演者以外に効果のために客席で幽霊となって登場

したり、照明を調節したりするなど人手を必要とする。五郎兵衛が鈴本出演の際には、弟子である新治も同行して手伝いをするのが度々であった。

やがて新治自身が鈴本演芸場の定席に顔付け(出番が組まれる)されるようになるのだが、それには師匠五郎兵衛も知らなかった、東京の落語家たちとのつながりが背景にあったのだ。

#### 3-1 学校寄席

現在においても、小中高校で「芸術鑑賞会」などと銘打った落語の実演が行われている。この学校寄席こそが、新治と東京の落語家・落語界を繋ぐ重要な役割を果たしている。この点について、2019年5月10日に深川江戸資料館で開催された「露の新治落語会」に柳家さん喬(やなぎやさんきょう、1948年8月4日-)をゲストに招き、その縁についてプログラムに解説している。

さん喬師匠との出会いは35年以上前のことです。当時、学校寄席が盛んでした。主に江戸の咄家さんでしたが、上方も入れよう、ということになり、関山和夫先生の推薦で、桂雀三郎師匠、笑福亭福三(現:福郎)師匠のお二人に、私が紛れ込みました。公演の予算はさまざま、豪華版は、小南師匠、扇橋師匠が座長で色物も華やか。予算少なめの公演(私はこれがほとんどでした)の座長は、さん喬、一朝、小燕枝という当時バリバリの若手真打の師匠方。一番リーズナブルなパックは、扇遊師匠と私だけというのもありました。この学校寄席のご縁で、後に、私の師匠 露の五郎兵衛のお供で鈴本演芸場や国立演芸場に出してもらった時、師匠方に親しく声をかけて戴けたのです。これには五郎兵衛も驚いていました。

そして十年前、さん喬師匠と繁昌亭で再会。大変気に掛けて戴き、NHKのえほん寄席や、ご自身がトリをとる寄席に「出ませんか?」とお声がけ戴きました。それが鈴本のお盆興業、また、三田落語会やらくだ亭の出演につながりました。この上ないご恩を戴いています。

このように学校寄席における、さん喬をはじめとする東京の師匠方との出会いが、新治の定席出演に大きな力となるのだ。

### 3-2 鈴本演芸場への顔付け

東京の定席では、月の上旬の10日間を「上席（かみせき）」、中旬を「中席（なかせき）」、下旬を「下席（しもせき）」と呼んで、原則同じ出演者で寄席を運営することが一般的である。新治が初めて定席に顔付けされたのは、鈴本演芸場の2012年6月中席、さん喬がトリ（主任、その興行の責任者で一番最後に舞台に上がる）の興行に「仲入り（前半の最後の出番、この後休憩が入る）」として抜擢されたのだ。10日間の出演は好評を博し席亭（寄席のオーナー）にも気に入られ、翌年からのお盆興行に毎年出演するようになる。

鈴本演芸場では、例年8月中席夜の部に、柳家さん喬・柳家権太楼（やなぎやごんたろう、1947年1月24日－）という人気実力共に東京を代表する二人に交互にトリをとらせる「吉例夏夜噺 さん喬・権太楼 特選集」という人気の番組を続けている。新治は、2013年から連続してこの興行の「仲入り」に用いられている（2020年はコロナのために不参加）。これによって、多くの東京の落語ファンに上方落語家・露の新治の存在が知れ渡ったのであった。

### 3-3 三田落語会への顔付け

落語が聞けるのは定席だけではない、落語家自身がプロデュースする落語会もあれば、他の団体・組織が企画する「ホール落語」も様々な展開されている。東京のホール落語の一つに「三田落語会」がある。これは、(株)文化放送が主催し、公益財団法人仏教伝道教会が協賛するもので、東京の落語ファンの間では「本寸法」と評価されて人気の会である。二人の演者がたっぷり時間を掛けて得意ネタを二席ずつ披露するというものであって、こちらにも、さん喬の推薦で顔付けされるようになる。

新治がこの会に最初に登場したのは、2013年6月22日「第26回三田落語会夜席」でのさん喬との二人会であった。その後、2014年8月23日「第33回三田落語会夜席」では柳家喬太郎（やなぎやきょうたろう、1963年11月30日－）、2016年1月30日「三田落語会大感謝祭昼席」では桃月庵白酒（とうげつあんはくしゅ、1968年12月26日－）、2016年2月20日「第42回三田落語会夜席」では春風亭一之輔（しゅんぷうていいちのすけ、1978年1月28日－）、

2016年6月9日「三田落語会第2回大感謝祭夜席」では柳家三三（やなぎやさんざ、1974年7月4日－）、2017年4月22日「第49回三田落語会昼席」では古今亭菊之丞（ここんていきくのじょう、1972年10月7日－）、2019年4月20日「第57回三田落語会夜席」では春風亭一朝（しゅんぷうていいちちょう、1950年12月10日－）と共演した。

ここに名をあげたのはいずれも定席でトリを任される実力者ばかり、もちろん、上方の落語家でこの会に顔付けされるものは新治以外にはいないのだ。いかに東京で新治の芸が評価されているかをよく示すものである。

### 3-4 大須演芸場への顔付け

新治の鈴本演芸場お盆興行への例年の出演は、新治への注目度を全国的に展開させた。その一つに、名古屋の定席・大須演芸場への顔付けがある。

大須というのはかつて「芸どころ名古屋」の中心地として、芝居小屋などが建ち並んでいたそうだが、大須演芸場は一時客足が遠のいて閉鎖をやむなくされたが、2015年にリニューアルオープンし、中京圏唯一の定席として奮闘している。近年、新治はこちらにも弟子の露の新幸（つゆのしんこう、1974年12月15日－）ともども、顔付けされるようになった。

2016年12月7日～10日はトリ、2018年1月1日～5日は「中トリ（東京では仲入りと呼ぶ）」、2018年8月7日～10日は怪談噺でトリ、2022年8月3日～5日は怪談噺でトリ。この出演によって、名古屋の落語家・落語ファンの間でも新治の存在感が大いに増したのであった。

### 3-5 北へ、南へ

さん喬との出会いは、新治の活動範囲をさらに加速化させた。以前から、「お笑い人権高座」で全国を走り回ってはいたが、それはあくまでも人権講演であって、本業の落語ではない。しかし、全国で落語会に招かれるさん喬と旅を共にすることで、いわばさん喬・新治の二枚看板での落語公演が全国に広がったのだ。

記録の確認できる2009年以降でみると、2009年には4回、2010年には6回、2011年には10回、2012年には9回、2013年には8回、2014年には7回、2015年には8回、2016年には8回、2017年には8回、

2018年には2回、2019年には6回、飛んで2022年には4回、日本列島各地をを二人で落語行脚しているのである。

#### 4 新治の七十噺

鈴木お盆興行や三田落語会での活躍で、新治の知名度は（特に東京では）どんどん大きくなっていく。しかし、そこで新治自身は大きなジレンマを抱えることになる。それは「持ちネタ」の少なさであった。落語家が何人も並ぶ寄席興行では、前の演者と同趣向のネタは御法度である。子どもの話や酒の噺が先にいければ、後の演者はそれを避けなければならないのだ。すると、持ちネタの少ない落語家が遅い出番になればなるほど、演じられるネタの候補がどんどんと少なくなっていくのである。

そこで意を決した新治は、自分の持ちネタを増やすために弟子の新幸と共に師弟研鑽の場・露新軽口噺<sup>6</sup>という落語会をスタートさせた。第1回が2017年5月13日、当時新幸が経営していたライブハウスがその会場、40人も客が入れば満席という狭い空間で自身のネタを増やすために、毎回のネタおろし（覚えたネタを初めて客の前で披露すること）に挑戦した。

2020年11月13日、回を重ねて27回目、会場は途中から動楽亭に変更していたが、3年半の時間を掛けて（途中でコロナによる中断が数度あったが）自分が演じられるネタ数=七十噺を達成することができた。滑稽噺・人情噺・怪談噺、師匠五郎兵衛の幅広い演目には及ばずとも自分なりに自信を持って提供できる演目に磨きを掛けることができたのだ。

#### 5 ブーメラン効果

新治の東京での活躍、名古屋への進出、地元上方以外の地での奮闘ぶりは、やがて関西での新治への再評価となってあらわれてくる。

現在、関西には大阪の「天満天神繁昌亭」、神戸新開地「喜楽館」、さらには桂ざこば（かつらざこば、1947年9月21日-）が開設して米朝事務所が運営する「動楽亭」という三つの定席がある。近年になって、新治がこれらの定席に顔付けされることが多くなり、中トリ・トリの出番が増えている。それとともに、新治に稽古をお願いする落語家の

数も急増している。

落語家は、修行中は師匠の指示で、修行が終われば（=年季明け）自分の判断で商品となるネタを覚えていく。ただし、自分のネタとするためには（原則として）他の落語家から稽古をつけてもらうことがルールとなっている。つまり、ネタの出自を明確にすることで、芸が伝承されていくのである。通常は若手が先輩にお願いして稽古していただくのだが、その際に金品の授受はない（もちろん、挨拶としての手土産は当然だが）。

言い換えれば、落語の稽古を頼まれるということは、当該落語家の業界での評価の指標ともなるのである。稽古をよく頼まれる落語家、よく頼まれるネタというのはそれだけ存在価値が上がるというものである。

新治は2009年7月28日の「日記」に、次のように記している。

ぼちぼちですが、私のネタをやりたいという人がでてきました。そのネタが認められたということで嬉しい限りです。ネタは「紙入れ」。稽古をしていると、師匠五郎兵衛に稽古をしてもらった時の情景が浮かんできます。今までにおすそ分けしたネタは「紙入れ、ごんべえ狸、兵庫舟、七段目、狼講釈、ちりとてちん、禁酒関所」の七席。どうやらこのあたりが、私のラインらしい。もっと増やさなアカンのでしょね。願生！！

新治への稽古依頼は、2012年から急増する。あくまでも「日記」で確認できるものに限定されるが、露の雅（みやび）・眞（まこと）・紫（むらさき）・瑞（みずほ）という、一門の露の都（つゆのみやこ、1956年1月21日-、日本で初の女性落語家）の弟子たちが入れ替わり立ち替わり、新治の自宅にて稽古に励んでいる。

やがて、一門外からも稽古を依頼する落語家が増え、近年では名古屋や東京からも稽古の依頼が来ている。稽古をつけたネタを「日記」で確認すると、上記の七席以外に「源平盛衰記」「中村仲蔵」「猿後家」「井戸の茶碗」「つる」「大丸屋騒動」「風呂敷」「雪の戸田川」「転宅」「皿屋敷」と十席となる。滑稽噺・人情噺・怪談話、上方林家と春団治の芸風、そこへ正蔵・彦六ゆかりのネタ、まさにハイブリッド落語家としての姿がここに表れている。

## 6 人権と落語の親和性

新治は、林家さん二から露の新次のころ、関西・四国のメディアを中心に活動するタレントとしてのイメージが強かった。オフィシャルサイトのプロフィール欄には以下のように記されている。

テレビ・ラジオのレポーターの合間に、結婚式・パーティー・カラオケ大会・キャンペーン・仮面ライダーショー・オークション・歌謡ショー・ビンゴゲーム・夏祭り・すいか割り大会等々の司会をこなす。特に「うどん早喰い競争」の司会は、他の追随を許さず。また1983年～1990年頃までは、MBS、OBC、RNC、徳島四国放送等々にCMで出演。よく声が出るが誰か分からず、「匿名の人気者」になる。

また、1991年11月に全同教奈良大会で「お笑い人権噺」を口演し、その後全国より依頼が殺到して「人権の新治」として飛び回ることになる。タレント活動と人権講演、多忙な毎日ではあるが、そこには落語に向き合う姿勢があまり感じられない。そんな新治を改めて落語に向き合わせ、落語の持つ力を教えてくれるのは、やはりさん喬であった。

2009年5月12日の「日記」には、さん喬をゲストに招いて天満天神繁昌亭で初めて開催した独演会についての記述がある。

私にとって繁昌亭で初めての寄席は、おかげさまで、補助席まで出る大入りで幕を開けさせて戴きました。独演会とせず「さん喬・新治二人会」とさせて戴いた効果は抜群で、今までに無い「電話問い合わせ」が何本もありました。今までの独演会は、お客さまのほとんどが世話人や私の知り合い。つまり、しがらみにすがって成立していました。それが今回は、落語ファンにアピールしたのです。もちろん問い合わせの全ては、さん喬師匠に関してでしたが（タァー！）。

会そのものは、手前みそになりますが「いい会」だったと思います。今までの独演会も精一杯取り組んできましたが、今回は一味違いました。普段やりなれている「ちりとてちん」を、あれだけ稽古したのは初めてです。結果は、それほどいいとは思いません。稽古したことにとらわれて「硬く」なっていました。ふだんの勢いがなく、決して満足なできではありませんで

した。鹿政談も同様です。けど「それでよかった」と思っています。それが今の私の力です。きちんと稽古したことはいつか力になると思います。心を落語に向けて戴いたさん喬師匠に感謝です。繁昌亭に感謝です。そして、死なれてみて分かった、師匠・五郎兵衛から戴いた「おかげ」です。今しみじみ「ありがたい」と思っています。

それまでの稽古嫌いから熱心な稽古に取り組んだことが報告されているが、それはやはりさん喬が「心を落語に向けて」くれたからであった。

また、2014年12月13日の「日記」には以下のような記述が見られる。

今日は、事始めです。上方落語家の世界では、今日は師匠の家に集まって事始めの儀式を行うのがならいす。本来なら、家で威儀を正して挨拶を交わし「かめちゃぶ」という、天かす井を戴き、芸道精進を誓うのですが、残念ながら叶いません。弟子を取る気の無かった私は、今日仕事を入れていました。やむなく後日ということになりました。私は、和歌山市の西教寺様（西本願寺）で、ありがたく勤めさせて戴きます。高座も作って落語もします。もうせんは提げてきました。かつては、お笑い人権高座だけでしたが、さん喬師匠に「講演だけで終わらず、落語をやらなくちゃいけません」と教えて戴き、そう心がけるようになりました。やってみると、けっこう喜んで戴けます。ほんまにありがたいかぎりです。今日も阿弥陀様の前で願生ります！

新治の弟子は露の新幸、2014年11月23日に弟子入りしている。そのため、「事始め」ができなかったという趣旨である。ここでもさん喬のアドバイスが新治に大きな力となっていることが語られている。その結果、それまでの人権高座だけではなく、そこに落語も取り入れることで多くの方により喜んでいただける現象を実感できたのである。このことは、人権と落語に親和性があることを強く示唆しているのではあるまいか。

因みに、ここに登場する「かめちゃぶ」とは何か、実はこれが正蔵と五郎兵衛の縁を示すキーワードでもあるので、2022年12月16日の「日記」を引用しておこう。

五郎兵衛一門が、事始めで戴くのは「天かす井」ですが、本来のかめちゃぶは、「牛めし」です。「かめ」は犬のことで、英語で犬を呼ぶのに「カモン」と言ってるのを「カメ」と聞き、犬を「カメ」と勘違いしたのです。小麦粉をメリケン粉、楽屋用語で、受付を「てけつ（チケットから）」というようなものです。「ちゃぶ」はご飯のことで、ちゃぶ台から来るとか、こちらはよおわかりません。つまりは、犬が食べるような肉めし。猫まんまと同じ発想かと思います。五郎兵衛は、師匠の二代目春團治亡き後、先代林家正蔵師匠（稲荷町）を師と仰ぎ、尊敬してました。それで、先代春風亭柳朝師匠と兄弟分になったり、怪談噺や芝居噺、仲蔵なども戴いたのです。肉めし（牛井）のかめちゃぶも、正蔵師匠からです。

春風亭一朝師匠に「稲荷町の肉めし」についてお尋ねしました。「牛すじを何日もかけて煮込んで柔らかくして、それに焼き豆腐と長ネギをいれ、ご飯にかけ、元旦に年始に来る噺家さんらに、お酒といっしょにふるまいます」とのことです。こちらも美味しそうです。江戸は噺家が各師匠がたの所へ年始の挨拶に回り、お接待を受けるそうです。それぞれふるまいの食事があって、古今亭志ん朝師匠の所では「カレー」やったそうです。「これが、楽しみでねえ」と、桂南喬師匠が仰ってました。その「牛めしのかめちゃぶ」を、牛すじが苦手な五郎兵衛が天かす井にアレンジして、事始めで食べるようにしたのです。なので、天かすのかめちゃぶは、五郎兵衛一門だけのものです。そして一門にとっては、思い出の味です。玉ねぎを出汁で煮込み、醤油、味噌で好みの味にし、天かすを入れ、とき卵をかけ回す？だけです。食べる時に、山椒の粉をかけると更に美味しくなります。

いささか引用が長くなったが、師匠・五郎兵衛と正蔵との絆の強さが伺えて微笑ましい。また、後段の春風亭一朝は、先に述べた学校寄席の頃からの知り合いで、やはり新治の東京での活躍に大きな力となった存在である。

再三指摘してきたように、新治にとってのさん喬は、まさに「第三の師匠」とでも呼ぶべき存在である。今日、日本の落語家で最も多忙な一人であるが、それは定席はもちろんのこと、全国各地から「さん喬師匠に来てほしい、さん喬師匠の噺が聴きたい」という熱心なファンが大勢いること

を示している。

これについては、さん喬自身の芸の力、人格的魅力は当然のこととして、やはりさん喬自身が落語の持つ力を信じていることも要因として挙げられよう。「講演だけで終わらずに落語をやりなさい」という新治へのアドバイスは、「お笑い人権高座」という新治の芸に足りないものを指摘したとも受け取れる。落語はたんに聴き手を笑わせるだけではなく、喜びや悲しみを含めた人の情に強く訴えかける芸であり、それ故に目の前の差別を「他人事」として済ませるのではなく、「自分事」として受けとめることを可能にするのではないか。

コロナが5類に移行することで、定席にも人が戻り、各地の落語会も賑やかに開催されるようになってきた。かつては、「お笑い人権高座」の看板を掲げて全国を飛び回っていた新治だが、今日では毛せん（高座に敷く紅い布）持参で「人権高座＋落語」をセットにしての口演が当たり前になってきた。それは、さん喬に教えられた落語の力を再認識することで、人権高座をよりパワーアップさせることができたのだ。人権と落語の親和性、この点についてさらに追求することを今後の課題としよう。

#### 【謝辞】

本研究については、引き続き露の新治師匠にひとかたならぬお世話になりました。また、オフィシャルサイト管理人のMORI様には有益なコメントを頂きました。お二人に、厚くお礼申し上げます。

#### 【注】

- 1 千里金蘭大学紀要第19号 (p.71~79)
- 2 <http://www.sinjikai.com/>
- 3 『スーパー大辞林 3.0』(三省堂)
- 4 オール巨人のフルスイング・一生懸命  
<https://ameblo.jp/o-rukyojin1116/entry-12518054252.html>
- 5 諸芸懇話会＋大阪芸能懇話会編（1989）古今東西落語家辞典、平凡社
- 6 これは初代露の五郎兵衛（1643? - 1703）の著書に由来する。

#### 【参考サイト】

- ・まいどおおきに露の新治です  
<http://www.sinjikai.com/>
- ・天満天神繁昌亭



- <https://www.hanjotei.jp/>
- ・神戸新開地・喜楽館
- <https://kobe-kirakukan.jp/>
- ・鈴木演芸場
- <http://www.rakugo.or.jp/>
- ・新宿末廣亭
- <https://suehirotei.com/>
- ・池袋演芸場
- <http://www.ike-en.com/>
- ・浅草演芸ホール
- <https://www.asakusaengei.com/>
- ・大須演芸場
- <https://osuengei.nagoya/>
- ・三田落語会
- <https://mita-rakugo.com/>

